

Opinion

大災害の時代 五百旗頭真



われわれは思いもかけず「大震災の時代」にめぐり合っている。日本列島の地震活動は、あの阪神・淡路大震災をもって平穏期から活発期に転じた。16年を経て昨年勃発した東日本大震災は超巨級の複合災害であった。問題の重大さはそれを地震活動のフィナーレと見るべきでない点にある。

第1回 はじめに

私は17年前の阪神・淡路大震災の内部に居合わせた。家族は無事だったものの、わが家は全壊。私の職場であった神戸大学では、ゼミ生の森澤君を含む39名の学生が犠牲者となった。6434名の犠牲者が阪神・淡路の地に屍を運ぶ事態は、戦後日本の平和な時代の想像を超えるものであった。被災地の未曽有の悲惨の中で、このようなさまざまの災害は二度とないであろう、否、あってはならない。二度となくならしめるよう社会を再強化し、再構築せねばならない。われわれはそんなふうに心に誓ったのである。

事実は神戸が例外的に突出した災害だったのではなかった。むしろそれは「大震災の時代」の到来を告げる号砲であった。それ以後、「大震災は忘れた頃にやってくる」との格言に反して忘れていく兆しもないほどに頻発した。地震だけをこつても神戸の大都市直下型の後は、中山間地域の中越地震、そして宮城・岩手の内陸地震とアングラを交え様相を多様させながら、昨年はついに東日本大地震津波がこの列島を襲ったのである。

「ここ」に留意したい。
第一に、過去の災害から教訓を学ぶ必要があるが、直近の強

「三大震災」の視座から



(左から) 阪神、東日本、関東大震災の被災地の様子
川口 龍一・菅野 平

現 復興推進委員
在、国の委員長、ひょうご震災
会委員、21世紀研究機構
理事長、熊本県立大理事
長、神戸大名大学教授、専
門は日本政治外交史。

烈な災害に認識を支配され過ぎている。阪神・淡路大震災は、外交官は前の講和会議を交渉する」と嘲罵されるのと同じく、大自然も絶えず人々の想定を覆切り、新たな奇襲攻撃をかけてくる。一つ覚えの主要なケースを漏れに取め、全体的な認識を得る必要がある。

過去を知り 未来を考える

本稿が、関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災の3者を検討の対象とするゆえんである。
この三大震災を検討し、今後にも列島に生起する多くの震災に對する知的準備としたいと思ふ。それ以外に、天正13(1586)年型の内陸部大地震を忘れることはできない。この大地震は、日本海に面した高岡の城、太平洋側は木曾川河口の長島城、そして琵琶湖畔の長浜城を倒壊させた(寒川旭「地震の日本史」中公新書)。飛騨を中心にくつかの活断層が運動したものと想われるが、今後モフォッサマグナ級の大断層が動くことをも想定しておかねばなるまい。これについては改めて

論じたい。
第二に、大自然は天災の配分において平等主義者ではない。戦後における米ソ対決の冷戦期は、大戦争なしに終わってしまふ「長い平和」(米国の歴史家、ジョン・ルイス・ギャータ)とも評されるに至った。
この時期の日本は、主観的には戦争忌避と憲法第9条の大義に拘り、客観的には日米安保体制と冷戦の膠着状況ゆえに、史上まれな平和を享受することができた。不思議なことに、大自然もこれに協賛し、冷戦期は日本列島における地震の平穏期でもあった。そして冷戦が終結し、1995年の阪神・淡路大震災により大地は激動の時代を

とその周辺に余震が頻発するたけでなく、この大地の大きな動きが遠く離れた地域にまで及び、みぞが拡大し、各地を抱える断層や火山の動きを活発化する作用が憂慮される。
その点で、専門家が気にかけるのが、貞観地震ツナリオである。869年の貞観地震はこの度の東日本大震災と似たものであり、東北地方に大津波を起した。そしてその後、日本各地の断層が動いた。当時の都・京都も地震に見舞われ、富士山も噴火した。そして18年後に南海・東南海の大地震津波を引き起こして、ようやく活断層を終わらせた。今回の東日本大震災をもつてヤマを越えたと思われる専門家は少ない。首都直下地

ほとんどの下に潜り込む。その接触面に清らかにすべる部分と、くっついて動く部分がある。後者が耐えられなくなった時点で激しくはね動かし、海洋プレート型の地震となり、津波を併発する。日本列島、とりわけ関東地方は四つのプレートが複雑にせめぎ合っている場所であり、その多層立方形式には解がないのかもしれない。ここが起って初めて認識される要因も少なくない。
とはいえ、地震研究の発展にはめざましいものがある。地球物理的なメカニズムの研究、コンピュータを駆使しているシミュレーションによるモデル化、それにボーリング調査による地層分析と歴史文獻研究を融合させることにより、古い災害の実像がよみがえり、新たに起り得ることの想定が、昔前とは比較にならないほどに可能となっている。
身近な一例を引くならば、かつて1993年の関東大震災は一つの大震災のように思われていた。しかし近年の研究成果を中央防災会議のプロジェクトで再評価した結果、6ヶ月分にはたして連続して起こった三つの地震による災害であることが明らかとなった。9世紀の貞観地震すら、われわれの認識の射程に組み入れられつつある。

震も、東海・東南海・南海の地震津波もそれぞれ迫っているように見られる。
マグニチュード(M)9.0の東日本大震災を中心に、16年前の阪神・淡路大震災、今後20~30年間に引き続き起こるかもしれない大災害と合わせて、地震活動性期の中でも格別規模の大規模なものの中に、われわれはめぐり合っているのではないだろうか。「大震災の時代」を論じなければならぬと思う。

地震発生メカニズムに関する研究は、近年急速に発展しているが、地震についての科学的データの蓄積はまだ薄く、新しい学問として始まったばかりである。大地の下で起っていることは捉え難い。日本列島は四つのプレート(ユーラシア、北米、太平洋、フィリピン海)の交錯する場であり、そのせめぎ合いによって浮上している島々である。単純にモデル化すれば、太平洋プレートが年に10センチ

日本を襲った近年の大地震

年月日	地震名	M
95年1月17日	阪神・淡路大震災	7.3
00年10月6日	鳥取県西部地震	7.7
01年3月24日	芸予地震	6.7
04年10月23日	新潟県中越地震	6.8
05年3月20日	福岡県西方沖地震	7.0
07年3月25日	能登半島地震	6.9
07年7月16日	新潟県中越沖地震	6.8
08年6月14日	岩手・宮城内陸地震	7.2
11年3月11日	東日本大震災	9.0

※「理科年表」などを基に作成。Mはマグニチュード

地震発生メカニズムに関する研究は、近年急速に発展しているが、地震についての科学的データの蓄積はまだ薄く、新しい学問として始まったばかりである。大地の下で起っていることは捉え難い。日本列島は四つのプレート(ユーラシア、北米、太平洋、フィリピン海)の交錯する場であり、そのせめぎ合いによって浮上している島々である。単純にモデル化すれば、太平洋プレートが年に10センチ